The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	太宰治「女生徒」論 : 視線意識と末尾
Author(s)	伊藤, 友紀恵
Citation	阪大近代文学研究. 2017, 14-15, p. 66-80
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67759
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

太宰治「女生徒」論
――視線意識と末尾

伊藤 友紀恵

はじめに

太宰治「女生徒」は、『文學界』一九三九年四月号に発表され、当時川端康成(1)に「女の精神的なものについて、大凡失望することの多い私は、この「女生徒」程の心の娘も現実にはなかなか見つからないのを知る」と絶賛された。この小説は、女生徒である「私」が、朝起きてから夜眠りにつくまでの一日を語る作品であり、大人になるということ、女になるということ、亡き父のこと、共に暮らす母のことについてなど様々な思考が展開される。

先行研究は榎本隆司(2)のものをはじめとし様々存在するが、本作の素材として使用された、太宰の一読者の日記である『資料集第一輯　「有明淑の日記」』(3)（以下「有明日記」とする）が二〇〇〇年に公開されたことを受け、以降は日記と「女生徒」本文との比較研究も積極的に進められてきた。同資料に付された相馬正一の論(4)を皮切りとし、有明日記の内容に加え、体裁や特徴に着目し、文の長さ、句読点の頻度、漢字・平仮名・片仮名の含有率など調査した上で、「女生徒」本文との関係を論じた櫻田俊子論(5)、相馬論に異を唱え、新たに有明日記と「女生徒」本文との比較を行い、「女生徒」のオリジナリティーを評価した細谷博論(6)、有明日記からの改変箇所を分析し、当時の時評家や読者意識を見出す何資宜論(7)、有明日記に書かれた太宰の構想メモ、素材としての有明日記からの取捨選択を分析することで、どのように「女生徒」が書き上げられたのかを考察した高橋秀太郎論(8)など、有明日記自体の分析、「女生徒」本文との比較、そこから生まれる新たな解釈が提示されてきた。

「女生徒」読解の上で、有明日記の存在は見逃せないものではあるが、日記公開以降であっても、有明日記と「女生徒」本文との比較研究を中心には据えずに論じた研究も存在する。ただ、松本和也(9)がこれまでの研究史を振り返り、

「こうして形成されてきた〝ゆれる・少女の・アイデンティティ〟を核とする「女生徒」研究の範型は以降も支配的な傾向となり、「女生徒」を太宰治研究史のなかで揺るぎない位置へとおしあげる一方で、多様な可読性からの防壁として機能した側面も否めない。」と述べているように、観点は様々ありながらも、解釈はある一定の方向に向かっているというのが研究の現状のように思われる。

こういった先行研究の中で、しばしば問題として着目されてきたのは、冒頭、「近衛さん」の写真を見る場面、ロココ料理を作る場面と同様に、有明日記には見られない太宰の創作部分であると明らかにされた、本作末尾の解釈である。

おやすみなさい。私は、王子さまのゐないシンデレラ姫。あたし、東京の、どこにゐるか、ごぞんじですか？もう、ふたたびお目にかかりません。

「私」が眠りにつきながら、誰かに呼びかけるというこの末尾部分については、「この結びの、とりわけ最後の一文の意味するところは何か、それを改めて問うても意味はあるまい。」(10)とされながらも、これまで様々な解釈が提示されてきている。一人称が「私」から「あたし」へと変化することをうけ、「私」の〈甘え〉を見出す高橋宏宣論(11)、「王子さまのゐないシンデレラ姫」という部分に着目し、「自分は王子さまが訪れるような特別な人間ではないのであり、苦しみながらもその苦しみを受け入れている多くの人々と同じように強く生きて行こうとする意識が窺える」と解釈する兼弘かづき論(12)、同じ箇所に着目しながらも、「眠りに落ちることで、この女生徒の一日は終わるけれど、「王子さまのゐないシンデレラ姫」という自己規定から生まれる不安定な情緒はそのまま残ってしまう」とする宮内淳子論(13)、「彼女は〈女〉にならない少女であると同時に、誰（どんな男）のものにもならない少女なのであり、永遠の〈少女〉として生き続けるのである」と「私」の少女性に着目した平石典子論(14)など、論者によって解釈は様々にわかれている。

この末尾の呼びかけ部分を解釈していくにあたり、本稿では語る「私」の仕草を見落とすべきではないと考える。

私は悲しい癖で、顔を両手でぴったり覆ってゐなければ、眠れない。顔を覆つて、じつとしてゐる。

末尾を語る「私」は、眠りにつきながら顔を覆い、自ら視界を暗くする。先に挙げた高橋論(15)の中でもこの仕草への言及があり、「「顔を両手でぴったり覆」う就寝前の行為はそのまま冒頭の目覚めの「かくれんぼ」の挿話に繋がり、最終部から冒頭部への回帰という円環構造を有しながら、大人になっていく直線的な時間を拒む姿勢」を読み取っているが、

冒頭へ回帰していく一要素として捉えるのみに留まらず、作品全体を通して見た場合、この仕草はより多くの意味を持つように思われる。「私」はこの仕草により、視覚という点で意識的に外界と自分とを隔て、何かを見ないようにしているように思われる。また本作では、目に関する言及がしばしば見られ、「私」の目や視線への関心の高さがうかがえる。このような、先行研究では見過ごされがちであった、目や視線という観点を導入することで、「私」が誰かに呼びかけるような語りを行う、末尾の新たな解釈の提示を試みたい。

一　「私」にとっての目の美しさ

顔を両手で覆い、自ら視界を暗くする「私」。この仕草は、意識的に目を閉じ、視界を自ら遮っているものだと言える。この仕草が持つ意味とは、一体何なのだろうか。本作には、「私」の目に関する言及が散見される。目を意識的に閉じる行為を読解する上では、このような言及を読み解いていくことが不可欠であろう。本節ではまず目についてどのようなことが語られているのかを確認していきたい。朝起きて鏡を覗く場面から、早速「私」は次のように語る。

眼鏡をとつて、遠くを見るのが好きだ。全体がかすんで、夢のやうに、覗き絵みたいに、すばらしい。汚ないものなんて、何も見えない。大きいものだけ、鮮明な、強い色、光りだけが目にはひつて来る。眼鏡をとつて人を見るのも好き。相手の顔が、皆、優しく、きれいに、笑つて見える。それに、眼鏡をはづしてゐる時は、決して人と喧嘩をしようなんて思はないし、悪口も言ひたくない。唯、黙つて、ポカンとしてゐるだけ。さうして、そんな時の私は、人にもおひとよしに見えるだらうと思へば、なほのこと、私は、ポカンと安心して、甘えたくなつて、心も、たいへんやさしくなるのだ。

榎本(16)はこの場面について、「「眼鏡をとって、遠くを見るのが好きだ」という女生徒は、見え過ぎる現実の汚濁や俗物の偽善を忌避する太宰のイロニイである。」と述べる。「太宰」のものと考えられるかはともかく、榎本論で指摘されている、見えすぎる物から逃れるという点は首肯される。また、近代日本女性における眼鏡をかけることの有りようを論じた森崎光子論(17)では、次のように述べられている。

当然のことだが、近視の人間は、眼鏡をかけないと外界がはっきり〈見えない〉が、かけるとはっきり〈見える〉。しかし、眼鏡なしでは生命身体の安全もおぼつかないというのなら別だが、そもそも外界をはっきり〈見る〉必要がどれほどあるのか。（中略）眼鏡をかけないほうが外界も人も、美しく優しく見えるし、「私」の心

も優しくなる。逆に言えば、眼鏡をかけていると、「汚ないもの」も見えるし、人に優しくもなれない。とすれば、眼鏡をかけないほうが「私」は幸福でいられるのではないだろうか。

森崎論においても、この眼鏡の場面だけを見て「私」の幸福と結びつけるのはやや性急に思われるが、確かに、眼鏡をかけない方が、「私」にとっての居心地の良い世界が広がっているようである。この場面で語られるのは、「眼鏡をと」ることで見える、「私」の世界である。「眼鏡をはづして」見える輪郭のぼんやりとした世界では、「私」自身の心持ちも変化する。「私」は周囲から自分がどのように見られているか意識しながらも、「ポカンと安心」することができる。朝目が覚めた瞬間から様々な思考を展開させ続ける「私」であるが、「眼鏡をはづしてゐる時は」「唯、黙つて、ポカンとしてゐるだけ」なのである。また、「人にもおひとよしに見えるだらうと思へば」の一言からもわかるとおり、「私」は自分が他者からどのように見られているかを意識している。一日の中の早い段階で、既に「私」は他者からの視線を強く意識していることが語られているのである。この、「眼鏡をはづして」周囲をかすませることで、周囲からの視線を意識しながらも安心できるという構図は、後にまた別の場面と併せて改めて詳述したい。

このように、先の引用では眼鏡をかけることで生まれる効果が語られていたが、この直後、「私」は眼鏡を否定し、次のように語りを覆す。そうして述べられるのは、目が美しいことの価値である。

だけど、やつぱり眼鏡は、いや。眼鏡をかけたら顔といふ感じが無くなつてしまふ。顔から生れる、いろいろの情緒、ロマンチツク、美しさ、激しさ、弱さ、あどけなさ、哀愁、そんなもの、眼鏡がみんな遮つてしまふ。それに、目でお話をするといふことも、可笑しなくらゐ出来ない。（中略）自分で、いつも自分の眼鏡が厭だと思つてゐる故か、目の美しいことが、一ばんいいと思はれる。鼻が無くても、口が隠されてゐても、目が、その目を見てゐると、もつと自分が美しく生きなければと思はせるやうな目であれば、いいと思つてゐる。

また、このような考え方は、次の学校から帰宅した場面からも見ることができる。

鏡を覗くと、私の顔は、おや、と思ふほど活き活きしてゐる。顔は、他人だ。私自身の悲しさや苦しさや、そんな心持とは、全然関係なく、別個に自由に活きてゐる。けふは頬紅も、つけないのに、こんなに頬がぱつと赤く

て、それに、唇も小さく赤く光つて、可愛い。眼鏡をはづして、そつと笑つてみる。眼が、とつてもいい。青く青く、澄んでゐる。美しい夕空を、ながいこと見つめたから、こんなにいい目になつたのかしら。しめたものだ。

前者の引用で鼻や口よりも目の美しさが一番だとしていること、また後者の引用で、「私」は自分の顔の頬や唇にも着目してはいるが、最終的に目の良さにたどり着いていることから、「私」の中で目の美しさに重点が置かれていることがわかるだろう。

また、朝「私」が学校に向かう電車に乗っている場面でも、目への言及が見られる。「私」と向かい合って座る「サラリイマン」の「眼が、どろんと濁つてゐる」や、「二、三日まへから、うちのお庭を手入れしに来てゐる植木屋さん」の「目がよい」など、双方とも目の良し悪しに言及されている。ここからも、「私」の目への関心の高さをうかがうことができる。また、「私」にとっての目の良さは、その人自身の良さにも繋がっていると考えられる。「植木屋さん」についての言及において顕著だが、「植木屋さんにして置くのは惜しい気がする」という「私」の判断は、外見的な要因、特に目の良さによるものだと思われる。「サラリイマン」についても、「みんな、いやだ」と断じられた直後に「眼が、どろんと濁つてゐる」というように目について指摘が行われ、「私」の中で、目の良さとその人自身の良さが、直接結びついていることをうかがうことができる。

しかし、ここでもう一度、「私」が学校から帰宅した場面に立ち返り、「私」にとって目の美しさがどのようなものであるのかを確認したい。「私」は鏡を覗きながら、「顔は、他人だ。私自身の悲しさや苦しさや、そんな心持とは、全然関係なく、別個に自由に活きてゐる」と語り、「私」自身の心持と切り離している。ここで語られる「私」の目の良さは、「私」の語る現在の心持とは関係のない位置にいて、良い目になった理由は、「美しい夕空を、ながいこと見つめたから」とされている。「しめたものだ」という一言も見逃せない。「美しい夕空」のおかげで、たまたま都合よく良い目になったのであり、それを喜ぶ「私」の姿は、目の良さを心から価値あるものとして見ているとは考えがたい。確かに「私」は、「目の美しいことが、一ばんいいと思はれる。」と語り、自分以外の人間を見るときも、目の良さに着目し、その人自身の良さにも繋げている。しかし、先に見た通り、「私」にとって「顔は他人」なのである。「私」自身が己の内面と顔との繋がりを否定している通り、「私」にとっての目の美しさは、自分自身を含めた人を評価する要素の一つでありながら、非常に表面的で、実際には内面に関わるものではないと、ここから読み取ることができる。

このような表面的な美しさに関することとしては、「私」

が「ロココ料理」を作る場面からも見られるだろう。先行研究においても様々指摘があり、例えば坂森美奈論[18]では、「表面的な美醜を基準にしているはずの「私」が、見かけが美しいロココ料理を作っている最中に、「ひどい虚無」に陥るのは何故か。ここには表面的な美以外の基準（伊藤註――「女特有の性質に反発する基準」「道徳的な理想を求める基準」）が存在している可能性が示唆されている」と指摘されている。更に平石論[19]においては、「空疎を自覚しながらそこに「純粋の美しさ」を見出すことによって、「私」は、自らを肯定的に読み替えようと」するものの、「「私」のこの美意識は、誰にも理解されることがな」く、「結局、「私」は自らの本質を外界に対して閉じ、「ひとりきりの秘密を、たくさんたくさん持つやうに」なるのである」と述べられている。このように先行研究においては、「ロココ」のように「内容空疎」であり美しいという性質を肯定的に捉えながらも、それは覆されていくと考えられていることがわかり、首肯できるものである。

「私」にとって目の美しさは重要ではあるものの、「顔は、他人だ。私自身の悲しさや苦しさや、そんな心持とは、全然関係なく、別個に自由に活きてゐる」と語られるように、内面とは関わることのない、非常に表面的なものであった。この「ロココ料理」も、見た目だけは美しく、食べる人をごまかすことができる。「私」にとっての美しさが「内容空疎」のものであるということが、この場面からも読み取れるのである。

また、目に関する事項でもう一つ見落としてはならないのは、「いとこの順二さん」の弟の、目の見えない「新ちやん」に思いを馳せる場面である。この場面は、呼びかける「私」が眠りにつくときに顔を両手で覆うという仕草と深く結びつくものであることを、あらかじめ記しておきたい。

「新ちやん」は「順二さんの弟で、私とは同じとし」で「わかいのに、失明」しており、「私は、親類中で、いや、世界中で、一ばん新ちやんを好きだ」と語られる。「どうしてあんなに、いい子なんだらう」というように「新ちやん」のことが語られると同時に、「新ちやん」と比較した「私」の姿も浮かび上がってくる。目の見えない「新ちやん」は、不平やわがままも言わず、癇癪も起さず、素直で、「いつも明るい言葉使ひ、無心の顔つきをしてゐる」が、「私」は常に「いやらしい、煩瑣な堂々めぐりの、根も葉もない思案の洪水」の中におり、二人は対照的であると言える。

高橋[20]は「「私」は、或る対象を肯定するか否定するかのどちらかで、その中間というものがない。事実、「女生徒」は、相互補完的な二項対立要素で充溢している」というように「対義的言辞が頻出する」ことを指摘し、「「ジヤピイ」と「カア」、父と母、「小杉先生」とバスの中の「いやな女のひと」、いとこの「新ちやん」と自分等に重ねられて事

実認定されていく。」と述べ、「新ちやん」と「私」との対比を指摘している。

ここで、「私」が朝、鏡を覗く場面を今一度確認したい。眼鏡を外した「私」は視界が不確かとなり、周囲に対する認識も変化する。かすんだ視界の中では、喧嘩もせず悪口も言わず、また私自身の「心も、たいへんやさしく」変化をする。この場面は、先に挙げた「新ちやん」と通じるところがある。すなわち、視界の不明瞭さが心の穏やかさに繋がっている、という点で両者は共通しているのである。更に、「新ちやん」に思いを馳せる場面で重要なのは、目の良し悪しを語る以前に、「新ちやん」が盲目であるということである。目の美しさは「内容空疎」でありながらも、「私」にとって価値あるものであることを読み取ってきたが、「新ちやん」にはその価値基準そのものが適用されない。「美しい夕空を、ながいこと見つめたから、こんなにいい目になつたのかしら。」と語られるような目の美しさを獲得することは、盲目の「新ちやん」にとっては不可能なのである。

「私は、親類中で、いや、世界中で、一ばん新ちやんを好きだ。」の一言からもわかる通り、「いやらしい、煩瑣な堂々めぐりの、根も葉もない思案の洪水」にいる「私」にとっては、「わかいのに、失明」しながらも、「不平や人の悪口」を言わず、「いつも明るい言葉使ひ、無心の顔つき」の「新ちやん」の心持で生きることが一番の望みであると捉えられるのではないだろうか。これまで見てきた、「ロココ料理」以外の目に関する記述については、「有明日記」にも見られるところである。また次項にて詳しく読解を進めて行く視線については、五月三日「それに、今日の銀座は、よかつた。いつもの人と人とのにらめつこ、人を見る、見られる／の通りで無くて、らくだつた。」との記述があるが、これらは三ヶ月の日記の中で特別頻出する事柄ではなく、「女生徒」の中で語られるような濃密さは見られない。すなわち「女生徒」という作品を作り上げる上で太宰が意図的に構成したと言える。この点から言っても、目に関する「私」の言及が重要性を帯びてくることがわかるのである。

二　「私」が身にまとうもの

ここでは、「私」の身にまとうもの、すなわち、「私」の「小さい白い薔薇の花を刺繍し」た「下着」や、「古ぼけた奇態な、柄のひよろ長い雨傘」などの服飾品を中心に取り上げ、「私」の視線意識について、更に検討したい。本作には服飾品がたびたび登場し、それぞれが象徴的に扱われているように思われる。(21)

まずは、朝起きて着替えるとき、「伊藤先生」の絵のモデルになるとき、帰宅して着替えるとき、と複数回にわたって登場する「下着」についてである。

きのふ縫ひ上げた新しい下着を着る。胸のところに、小さい白い薔薇の花を刺繍して置いた。上衣を着ちやふと、この刺繍見えなくなる。誰にもわからない。得意である。

ああ、こんな心の汚い私をモデルにしたりなんかして、先生の画はきつと落選だ。美しい筈がないもの。いけないことだけれど、伊藤先生がばかに見えて仕様がない。先生は、私の下着に、薔薇の花の刺繍のあることさへ、知らない。

お部屋へはひると、ぼつと電燈が、ともつてゐる。しんとしてゐる。お父さんゐない。やつぱり、お父さんがゐないと、家の中に、どこか大きい空席が、ポカンと残つて在るやうな気がして、身悶えしたくなる。和服に着換へ、脱ぎ捨てた下着の薔薇にきれいなキスして、それから鏡台のまへに坐つたら、客間のはうからお母さんたちの笑ひ声が、どつと起つて、私は、なんだか、むかつとなつた。

この「下着」については、先行研究においても様々な言及がある。関根順子論[22]では、薔薇の持つ象徴性に着目した上で、「自分を日常から遮蔽するある種のお守りの役目を果たしているようだ」と述べられている。また、権田浩美論[23]では、「私」の他者を拒む姿勢が読み取られ、斎藤佳菜子論[24]では「私」の持つ秘密と、「私」の他者に対する意識が見出されている。

刺繍が薔薇の花であることは、先行研究でも指摘されているとおり確かに象徴的なものだと思われるが、本論では花そのものが持つ意味にはこだわらず、下着に刺繍が施されていること、「私」がその刺繍の施された下着を身に着けること自体に着目したい。この「下着」の特徴としてまず挙げられるのは、「私」自らの手による刺繍であるということ、「下着」であるがゆえに、その刺繍は隠され、「私」以外の誰も、刺繍の存在を知り得ない、ということである。斎藤論で述べられているように、この「小さい白い薔薇の花」の刺繍は、誰も知らない「私」だけの秘密である。また「得意である」「脱ぎ捨てた下着の薔薇にきれいなキスして」という記述からもわかる通り、「私」が大切にしているものである。

これまで先行研究において、「私」のアイデンティティの揺れについてたびたび言及されてきているが、この下着の存在も、その一端を担うものであろう。すなわち、「自分の個性みたいなものを、本当は、こつそり愛してゐるのだけれども、愛して行きたいとは思ふのだけど、それをはつきり自分のものとして体現するのは、おつかないのだ。」と「私」が語る「個性みたいなもの」に該当するのが、この「下着」な

のではないだろうか。誰も知らない、「私」自身が作り上げた、「自分の個性みたいなもの」なのである。この点を踏まえ、「風呂敷」「アンブレラ」などと比較してみると、それぞれの違いがより明確に浮かび上がってくる。

「私」の通学中に登場する「風呂敷」は、「ちやうど、あの植木屋さんはじめて来た日に、お母さんからもらつた」ものであり、「綺麗な女らしい風呂敷」とされている。また「私」は「この可愛い風呂敷を、ただ、ちよつと見つめてさへ下さつたら、私は、その人のところへお嫁に行くことにきめてもいい」とさえも思う。

関谷一郎(25)はこの「風呂敷」について、「同一化した風呂敷が認められるということは、自分が受け容れられることになる。したがって同一化した風呂敷が認められるということは、自分が受け容れられることになるのであり、この短絡(アイデンティファイ)(伊藤註――「一時的にこの風呂敷に自己同一化している」ということ)も自同性が不安定だからこそ可能なのである。」というように、アイデンティティの揺らぎへと繋げている。

確かに「風呂敷が認められること」イコール「自分が受け容れられること」という点は首肯できるが、「風呂敷」イコール「私」と直接的に結び付けられる点には疑問が残る。ここでの「風呂敷」とは「私」そのもの、「私」自身の本当の姿ではなく、他者にこのように見られたら差し支えはない、と考える「私」の姿なのではないか。「綺麗な女らしい」という言葉からも、後に「雌鶏」と形容される女らしさとは違い、「私」はこの「風呂敷」の持つ女らしさを、そして「風呂敷」自体を肯定的に捉えているということもわかる。

「私」が肯定的に捉え、他者から求められていると「私」自身が思っている「私」の姿なのである。先に挙げた「下着」と決定的に違うのは、この点である。「私」が自ら刺繍を施した「下着」は自分以外見ることができず、母からもらった「風呂敷」は周囲からの視線に晒されても問題のないものとして登場する。「電車の中の皆の人にも見てもらひたい」というように、周囲の視線に晒されても問題はないが、結局は「誰も見ない」、つまり関谷の言葉を借りるならば、「認められない」という点も押さえておきたい。「私」が外部に発信する「私」は、外部から認められないのである。同じ「私」の持ち物でも、「アンブレラ」はこの点において「風呂敷」と差異がある。

「アンブレラ」は「風呂敷」と同じくお母さんからもらったものである。「お母さんが、昔、娘さん時代に使つたもの」であり、「夢を持つたやうな古風のアンブレラ」「この傘には、ボンネツト風の帽子が、きつと似合ふ」などと「私」に評され、傘を持って登校しようとする「私」が、その傘から夢を広げながらも、「ああ、をかしい、をかしい。」と軽やかにその夢を打ち消して現実に戻ってくる姿と、「柄のひよ

ろ長い」「古い雨傘」と評された傘が学校で歓待される姿が描かれる。「きのふお母さんから、もらつたよき雨傘どうしても持つて歩きたくて」という記述や「面白い傘を見つけて、私は、少し得意」というところから、「私」自身、「アンブレラ」を気に入っていることがわかるが、それと同時に、夢見る自分に対して「現実は、この古ぼけた奇態な、柄のひよろ長い雨傘一本。自分がみじめで、可愛想」とあるように、「アンブレラ」と、それを気に入る自分とをやや突き放すような語りを行っている。対して、クラスメイトはこの「アンブレラ」を「大歓迎」し、「騒ぎたて」、「伊藤先生」は「私」に、その雨傘を持って絵のモデルになるように指示をする。「私」と「私」以外の人間では、「アンブレラ」に対する評価が違うのである。特に、「伊藤先生」について、「私」が次のように語る場面は注目に値する。

ああ、こんな心の汚い私をモデルにしたりなんかして、先生の画は、きつと落選だ。美しい筈がないもの。いけないことだけれど、伊藤先生がばかに見えて仕様がない。先生は、私の下着に、薔薇の花の刺繍のあることさへ、知らない。

「伊藤先生」は「私」の「心の汚」さを知らない人物として語られ、また「私の下着に、薔薇の花の刺繍のあることさへ、知らない」とされる通り、「私」の表面的な部分しか見ていない。つまりこの「伊藤先生」やクラスメイトにとって、この「アンブレラ」は「私」の内面ではなく、外に向けて発信されうる「私」像を担うものとして機能している。「私」にとっての発信したい「私」像とは関係のない、他者から見た「私」像である。

ここで先の「風呂敷」の考察に戻りたい。「風呂敷」は「私」にとって、外部から見られても問題の無いもの、見てほしいものでもあるが、他者から見られることはない。反面、「アンブレラ」は「私」が誰かに見てもらいたいと望むものではないが、「伊藤先生」やクラスメイトの歓待を受け、見られるものとなった。そして初めに挙げた「下着」は、「私」だけが知るものであり、「私」が内側に隠しているものである。外部から見られても差し支えのない「私」(風呂敷)、外部から見られる「私」(アンブレラ)、外部が見ることのできない、隠された「私」(下着)という図式が、この三つの服飾品から見えてくる。「私」の他者からの視線への意識が、こういった点からも見出せるのである。

以上、「私」の身にまとう服飾品を中心に読解を進めてきた。一つめの「下着」は「私」が自ら刺繍を施したものであり、それは誰にも知られることがない隠されたものであるという点をおさえた。対して「風呂敷」は「私」自身が周囲に見せても差し支えないと思っている姿の表れであり、「アン

ブレラ」は「私」が望むか否かに関わらず、周囲が認定する「私」の表面的な姿であることを読み取った。

三　末尾の解釈について

これまで、「私」が常に周囲からの視線に晒されていること、周囲からの視線に晒されていることを意識していることを確認してきた。本項では本論の目的でもある、「女生徒」末尾の読解を行っていきたい。はじめに確認したところではあるが、今一度、末尾部分を引用する。

おやすみなさい。私は、王子さまのゐないシンデレラ姫。あたし、東京の、どこにゐるか、ごぞんじですか？もう、ふたたびお目にかかりません。

眠りにつき、一日を終えていく「私」の最後の言葉である。この部分を語る「私」は、次のような状態で眠りに就く。

私は悲しい癖で、顔を両手でぴったり覆ってゐなければ、眠れない。顔を覆って、じっとしてゐる。

末尾を読解する上での最初の手がかりは、この「私」の仕草であった。ただ目を閉じるだけではなく、両手で顔を覆い、自ら視界を暗くしている。この視界の暗さは、先に見てきた、盲目の「新ちやん」を想起させるのではないか。「私」が「新ちやん」のことを語る際、「ゆうべも新ちやんのことを思って、床にはひってから五分間、目をつぶってみた。床にはひって目をつぶってゐるのでさへ、五分間は長く、胸苦しく感じられるのに、新ちやんは、朝も昼も夜も、幾日も幾月も、何も見てゐないのだ」との一言がある。このようにただ目をつぶるだけではなく、敢えて両手で顔を覆うというのは、「癖」であるがゆえに無意識的でありながらも、暗闇に苦しみを感じても、その暗闇の中に留まり続けようとする「私」の意志が感じられる。そのような意志は、何に基づいて生まれてくるものなのか。

ここで、「私」にとっての「新ちやん」の位相を再度確認したい。「私は、親類中で、いや、世界中で、一ばん新ちやんを好き」であり、「煩瑣な堂々めぐりの、根も葉もない思案の洪水」にいる「私」の姿と比べて、「不平や人の悪口も言わず、「その上いつも明るい言葉使ひ、無心の顔つき」の「新ちやん」は、対照的な存在であった。語り続ける「私」と、「ただ、黙ってゐるだけ」の「新ちやん」という点でも、二人は正反対の存在であろう。「顔を両手でぴったり覆」う仕草によって、「私」は盲目の「新ちやん」と同じ視界を手にし、「新ちやん」のように素直な心持で生きることを希求していると言えるのではないだろうか。

「私」は周囲からの視線に非常に敏感であり、またその視

線があるからこそ、「個性みたいなもの」を「個性」として体現していくことができず、「煩瑣な堂々めぐりの」思案を抱えていた。不平もあれば、無心でいることもなかった。「女生徒」全体を通して「私」の繰り返される思考の渦は、周囲からの視線によるものが大きかった。

しかし、この暗闇の中ではどうだろうか。周囲を見ないことを選択した「私」の視界の中に、他者はいない。「私」は誰かに見られることを意識しなくて済む。「新ちやん」も同じである。周囲の人間を見ることができないがゆえに、周囲の者がどのような人であり、自分をどのように見ているか、どのように見られているから自分はこうしなければならない、という意識が働くことはない。「新ちやん」はそれゆえ、「私」とは対照的な「いい子」なのだ。暗闇の中で、「私」は周囲からの視線から逃れることができる。「私」にとってこの自ら作り出した暗闇の中では、「私」は「煩瑣な堂々めぐりの、根も葉もない思案の洪水」の苦しみから解放され、穏やかな心持ちでいることができる、と考えられる。

これまで確認してきたように、眼鏡を外し、視界の不明瞭な「私」は他者を意識しながらも心穏やかな状態にいる。ただしそれは、「新ちやん」のような素直な心持とは違い、「ポカンと安心して、甘えたくな」るものであって、「私」の望む生き方ではない。「私」のこのような甘えは「小金井の家」にいた頃の「私の特権」であり、現在では手にすることのできないものだからである。眼鏡を外した状態と、手で顔を覆った状態とでは、似ている部分はあるものの、性質のことなるものであり、だからこそ「私」は両手で顔を覆うことで暗闇を作ったのである。

また、この仕草の前に語られる、「幸福」についての言及も、末尾を読解していく上では見逃せない。顔を両手で覆う仕草、末尾の語り、更にこの「幸福」について述べる箇所も、有明日記には記述のない、太宰の創作箇所である。

> 明日もまた、同じ日が来るのだらう。幸福は一生、来ないのだ。それは、わかつてゐる。けれども、きつと来る、あすは来る、と信じて寝るのがいいのでせう。（中略）幸福は一夜おくれて来る。ぼんやり、そんな言葉を思出す。幸福を待つて待つて、たうとう堪へ切れずに家を飛び出してしまつて、そのあくる日に、素晴らしい幸福の知らせが、捨てた家を訪れたが、もうおそかつた。幸福は一夜おくれて来る。幸福は、――

「幸福は一生、来ないのだ。それは、わかつてゐる。けれども、きつと来る、あすは来る、と信じて寝るのがいいのでせう。」という言葉からは、「私」の幸福への希求と諦めが読み取れる。「新ちやん」のように素直な心持でいることを望みながらも、そのように生きられることはないと諦める

「私」だが、顔を覆い視界を暗くしているときだけは、その望みがかなうと信じられるのではないか。

以上のことをおさえた上で、末尾の読解を試みる。暗闇の中、「私」は「おやすみなさい」「もう、ふたたびお目にかかりません。」と別れを告げる。「あたし、東京の、どこにゐるか、ごぞんじですか？」との問いかけは、問いかけられた側がその答えを持たないことを前提に発せられていると考えられよう。だからこそ、「もう、ふたたびお目にかかりません。」と「私」に断じられることとなる。「私」が呼びかけるのは、「私」が別れを告げたい人である。このように「私」の側から考えたとき、浮かび上がってくるのは、「私」が常に視線を意識している、周囲の人たちではないだろうか。「私」は顔を両手で覆うことによって暗闇を作り、周囲の視線を意識しないような状況に自身を置いている。このようにして別れを告げることで、暗闇にいる今だけは、周囲の人々が向ける「私」への視線を断ち切ることができ、私自身も、周囲からの視線意識から解放されている。そしてこの暗闇にいるときだけは、「新ちやん」のように素直な心持で生きることができるという幸福を願い、信じられるのである。

おわりに

本論ではまず、第一章において、「私」の持つ目への関心や、目の美しさに対する価値が「私」にとってどういった位置づけにあるのかを読み取り、その表面的な美しさと関わることのない「新ちやん」の存在を確認した。更に「私」が周囲からの視線を意識していることを押さえ、第二章では「私」の身に纏う服飾品から、視線意識について詳しく読解を行った。第三章では以上のことを踏まえて作品末尾の呼びかける表現を解釈した。「私」が自ら暗闇を作り、呼びかけることで、周囲からの視線を断ち切り、その視線を意識することから解放されることにより、幸福を求め、諦めながらも、「新ちやん」のような素直な心持で生きたいと願う「私」の姿を読み取ることができた(26)。本論を通じ、「女生徒」という作品が「私」のとりとめのない一人語りに終止するのではなく、はっきりとした意志・願いを持った一少女の姿が浮かび上がってきたといえるだろう。

注

(1) 川端康成「小説と批評　文芸時評」(『文芸春秋』一九三九年五月号)

(2) 榎本隆司「『女生徒』論」(『作品論太宰治』双文社出版、一九七六年)

(3) 『資料集第一輯　「有明淑の日記」』(青森県文学館協会、二〇〇〇年)

(4) 相馬正一「太宰治の「女生徒」と有明淑の日記」(『資料集第一輯　「有明淑の日記」』青森県文学館協会、二〇〇〇年)

（5）櫻田俊子「太宰治「女生徒」論――素材有明淑の日記公開を受けて」（『櫻田俊子論考集　太宰治　女性独白体――「語る女」と「騙る作家」――』丸善雄松堂、二〇一六年／発表：二〇〇三年・修士学位論文）
（6）細谷博「「女生徒」の自立性――『有明淑の日記』との関係で――」（『アカデミア』（文学・語学編）第七十三号、南山大学、二〇〇三年）
（7）何資宜「太宰治「女生徒」試論――『有明淑の日記』からの改変にみる対川端・対読者意識」（『国文学攷』第百九十六号、広島大学国語国文学会、二〇〇七年）
（8）高橋秀太郎「太宰治「女生徒」成立考――構想メモと『有明淑の日記』（上）」（『日本文芸論叢』第十六号、東北大学文学部国文学研究室、二〇〇二年）ならびに同「太宰治「女生徒」成立考――構想メモと『有明淑の日記』（下）」（『日本文学論稿』第二十八号、東北大学文芸談話会、二〇〇三年）
（9）松本和也「主題としての〝喪の仕事〟――太宰治「女生徒」論」（『立教大学日本文学』第一〇八号、立教大学日本文学会、二〇一二年）
（10）傳馬義澄「「女生徒」」（『国文学　解釈と鑑賞』第六十一巻六号、至文堂、一九九六年）
（11）高橋宏宣「〈甘え〉の機巧と〈幸福〉の仮構――太宰治「女生徒」論――」（『文藝研究』第百五十三集、日本文芸研究会、二〇〇二年）
（12）兼弘かづき「太宰治「女生徒」論――女生徒の新しい出発と「家族」の意義――」（『日本文芸研究』第五十三巻第四巻、関西学院大学日本文学会、二〇〇二年）
（13）宮内淳子「「女生徒」論――「カラツポ」を語るとき――」（山内祥史編『太宰治研究　4』、和泉書院、一九九七年）
（14）平石典子「少女とロココ――「女生徒」における〈少女〉表象――」（増田裕美子・佐伯順子編『日本文学の「女性性」』、思文閣出版、二〇一一年）
（15）（11）に同じ。
（16）（2）に同じ。
（17）森崎光子「眼鏡をかける女・かけない女――二葉亭四迷『浮雲』から太宰治「女生徒」まで――」（『近代文学論創』第三号、論創近代文学研究会、二〇〇〇年）
（18）坂森美奈「太宰治『女生徒』論」（『国語国文学』第四三号、福井大学国語学会、二〇〇四年）
（19）（14）に同じ。
（20）（11）に同じ。
（21）「揺れ動きの内実は（中略）自分の意識がすべてであった子ども時代と異なり、他人が望む自分像があることを知った現在、どちらに調律すべきかという迷いであり、それらは特に「洋服」において語られるように、他者の視線を意識しない／するという対立に重ねあわされている」と、小平麻衣子「文学の危機と〈周辺〉の召喚――女性の執筆行為と太宰治・川端康成の少

女幻想の間――」（『日本文学』第五十七巻四号、日本文学協会、二〇〇八年）に述べられている。

（22）関根順子「太宰治「女生徒」論――少女の語り　空洞の向こうへ――」（『ＫＹＯＲＩＴＳＵ　ＲＥＶＩＥＷ』第四十号、共立女子大学大学院文芸学研究科、二〇一二年）

（23）権田浩美「太宰治『女生徒』論――美の転倒と〈作者〉の出現」（『愛知論叢』第七十九号、愛知大学大学院院生協議会、二〇〇五年）

（24）斎藤佳菜子「太宰治『女生徒』論――有明淑の日記との比較を通して――」（『日本文学誌要』第八十八号、法政大学国文学会、二〇一三年）

（25）関谷一郎『『女生徒』試読」（『国文学　解釈と鑑賞』第五二巻六号、至文堂、一九八七年）

（26）作中に登場するもう一つの呼びかける語り、すなわち、「私」が夜中に洗濯をしている場面での、「わるいのは、あなただ。」という一言も、今後併せて解釈していく必要もあると思われる。

【付記】「女生徒」の引用は、『太宰治全集』（一九七五・筑摩書房）所収の本文に拠り、旧字体を適宜新字体に改めた。有明日記の引用は、『資料集第一輯「有明淑の日記」』に拠り、既に翻刻されているものを用いて、改行は「／」にて示した。

（いとうゆきえ／本学大学院博士前期課程）